

第一朗読 (マラキ3章1-4節)

- 1 見よ、わたしは使者を送る。
彼はわが前に道を備える。
あなたがたが待望している主は
突如、その聖所に来られる。
あなたがたが喜びとしている契約の使者
見よ、彼が来る、と万軍の主は言われる。
- 2 だが、彼の来る日に誰が身を支えうるか。
彼の現れるとき、誰が耐えうるか。
彼は精錬する者の火、洗う者の灰汁のようだ。
彼は精錬する者、銀を清める者として座し
レビの子らを清め、金や銀のように彼らの汚れを除く。
彼らが主に献げ物を正しくささげる者となるためである。
- 4 そのとき、ユダとエルサレムの献げ物は
遠い昔の日々に、過ぎ去った年月にそうであったように
主にとつて好ましいものとなる。

福音 (ルカ2章22-40節)

22 さて、モーセの律法に定められた彼らの清めの期間が過ぎたとき、両親はその子を主に献げるため、エルサレムに連れて行った。23 それは主の律法に、「初めて生まれる男子は皆、主のために聖別される」と書いてあるからである。24 また、主の律法に言われているとおり、山鳩二つがい、家鳩の雛

二羽をいけにえとして献げるためであった。

25 そのとき、エルサレムにシメオンという人がいた。この人は正しい人で信仰があつく、イスラエルの慰められるのを待ち望み、聖霊が彼にとどまつていた。26 そして、主が遣わすメシアに会うまでは決して死なない、とのお告げを聖霊から受けていた。27 シメオンが霊に導かれて神殿の境内に入つて来たとき、両親は、幼子のために律法の規定どおりにいけにえを献げようとして、イエスを連れて来た。28 シメオンは幼子を腕に抱き、神をたたえて言った。29 「主よ、今こそあなたは、お言葉どおり、この僕を安らかに去らせてくださいます。30 わたしはこの目であなたの救いを見たからです。31 これは万民のために整えてくださった救いで、32 異邦人を照らす啓示の光、あなたの民イスラエルの誉れです。」

33 父と母は、幼子についてこのように言われたことに驚いていた。34 シメオンは彼らを祝福し、母親のマリアに言った。「御覧なさい。この子は、イスラエルの多くの人を倒したり立ち上がらせたりするために定められ、また、反対を受けるしるしとして定められています。35 ——あなた自身も剣で心を刺し貫かれます——多くの人の心にある思いがあらわにされるためです。」36 また、アシエル族のファヌエルの娘で、アンナという女預言者がいた。非常に年をとつていて、若いとき嫁いだから七年間夫と共に暮らしたが、37 夫に死に別れ、八十四歳になつてた。彼女は神殿を離れず、断食したり祈つたりして、夜も昼も神に仕えていたが、38 そのとき、近づいて来て神を賛美し、エルサレムの救いを待ち望んでいる人々皆に幼子のことを話した。39 親子は主の律法で定められたことをみな終えたので、自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰った。40 幼子はたくましく育ち、知恵に満ち、神の恵みに包まれていた。

朗読から祈りへ

驚き―

イエスの両親は忠実に律法を守る。その両親はシメオンの預言に驚く。両親が思いもよらない幼子の未来の姿。律法を越えた救いの出来事。イスラエルの民をはるかに越えた「万民」の救い。このメッセーシは二十一世紀を生きるわたしたちにも喜びをもたらす。神の救いは「今の」わたしたちにもおよぶから。

救い主の誕生はイスラエルの民にだけ与えられたものではない。イスラエルの民を越える「万民」に救いをもたらされることが「イスラエルの誉れ」となる。救いは一民族に限られたものではない。シメオンは聖霊によってそのことを教えられる。世界のすべてを包み込む聖霊が、そのことを教える。救いは一民族にもたらされるのではなく、この幼子によってすべての人にもたらされると。

わたしたちは、このシメオンの預言に驚き、喜ぶ。今を生きるわたしたちも「万民」に含まれているから。わたしたち「異邦人」も「啓示の光」によって照らされているから。

主の律法で定められたことをみな終えた親

子は自分たちの町であるガリラヤのナザレに帰る。しかし、かれらは単に律法の務めを果たして満足して帰るのではない。思いもよらない救いの「普遍性」をシメオンを通して聖霊によって示されたかれらは「驚き」と希望をもつて帰路についたに違いない。イエスの誕生の意味を「思い巡らしていた」（19節）マリアに一つの解答が与えられた。弱く貧しく生まれた幼子はイスラエルを越える「万民の救い主」であると。

―異邦人の救い―

ルカ福音書は一貫して「異邦人への救い」、聖霊の働き、そしてそれが貧しい人々にもたらされたことを強調しているように思える。年末にフィリッピンのミンダナオ島に行き、年を越した。聖家族の主日に出発し、公現祭の翌日に帰国した。「救い主の誕生」について思い巡らした。危険といわれているイスラム地区の難民を訪ね、炊き出しをした。電気もない山岳地帯の貧しい村を訪ね、人々の温かさに触れた。公現祭にはマノボ族の子、ピサヤ族の子、そしてイスラムの子たちとミサに参加した。

少しわかった。人々は律法を越えて救われ

ることが。幼子は「万民の救い主」として生まれたことが。十字架の上で死ぬ幼子の人生は聖霊に満たされたものであり、その発せられるみ言葉は異邦人に向けられていたものだということが。

北コタバト地方に「ミンダナオ子ども図書館」という施設がある。六十人ほどの子どもたちが日本の人たちから奨学金を受けて共同生活をしながら学校に通っている。貧しい子どもたちの中でも最も貧しいと思われる子どもたちが優先的に奨学金を受ける。宗教、民族、文化を越えて共に生きる「そこ」には真の平和がある。かれらは紛争によって生まれた難民のところにも「読み語り」に行き、炊き出しをし、医療の必要な子は「図書館」に連れ帰り必要な治療を受けさせる。子どもたちが子どもたちを助ける。

公現祭の前晩、降っていた小雨が止み、外に出て見上げると「図書館」の真上に星雲があった。真上に。そこだけに星がきらめいていた。

少しわかった。「ここ」に救い主がいると。「万民のために整えてくださった救い」があると。「異邦人を照らす啓示の光」があると。

翌日、子どもたちと公現祭のミサに参加し、「図書館」を後にした。心は喜びで一杯だった。